

動物実験作業者における アレルギー調査

稲岡雄太 大菊麻貴子 川久保弥知
田井龍太 武市桃子 平林健一 吉田尚史

目的

動物実験作業者は職場で日常的に動物に接するため、動物アレルギーを発症する可能性が高いと考えられる。動物アレルギーと感作予防の実態を調査することで、様々なリスク因子との因果関係を調べるとともに実験者に対して予防法やリスク因子をフィードバックすることを目的とした。

対象と方法

対象：高知大学医学部において日常的に何らかの実験（動物実験に限らない）を行っている者

方法：自記式質問票による調査

内容は以下のとおり

動物実験の関与の有無、動物実験内容、実験期間、実験の頻度、所属している教室での指導の有無、実験の際の予防具着用の有無、実験動物アレルギーの有無、実験動物以外のアレルギーの有無、アレルゲン家族歴、喫煙の有無性別、年齢等々

結果

今回の実験で、我々が対象とした集団の母数は 198 人である。このうちの有効回答者数は 169 人 (85.4%) であった。我々は、実験動物アレルギー発症者を、調査票で実験動物に対して何らかの自覚的アレルギー症状がある者、と定義した。実験動物アレルギー発症者割合は、17.6% (24/136 人) であった。以下、動物実験アレルギーを LAA と表記する。体重測定と床替えを行っている者で、LAA 発症率が有意に高いという結果になった。

考察

今回の調査から高知大学医学部において行なわれている様々な動物実験によって LAA が引き起こされていることが明らかになった。17.6% という高い発症率は現在の動物実験における LAA への対策が十分でないことを示している。LAA の予防に関して何らかの指導をうけたことがある人は 25.6% にとどまることも判明し、実態の周知及び新たな予防方法の提言が必要と考えられる。LAA 発症者で眼症状を挙げる人は 56.5% にのぼるが、実際の使用率は 4.0% とマスクや手袋に比べて非常に少なかった。眼症状を挙げる人が 56.5% にのぼることを周知し、防護めがねの使用を促す必要があると考える。